

第三十五回「児童・生徒の平和メッセー」詩部門 小学高学年の部
戦後八十年沖縄全戦没者追悼式「平和の詩」朗読作品

「おばあちゃんの歌」

豊見城市伊良波小学校六年 城間 一步輝

毎年、ぼくと弟は慰霊いれいの日に

おばあちゃんの家に行って

仏壇に手を合わせウートートーをする

一年に一度だけ

おばあちゃんが歌う

「空しゅう警報けいほう聞こえてきたら

今はぼくたち小さいから

大人の言うことよく聞いて

あわてないで さわがないで 落ち着いて

入って いましよう防空壕ぼうくうごう」

五歳の時に習ったのに

八十年後の今でも覚えている

笑顔で歌っているから

楽しい歌だと思っていた

ぼくは五歳の時に習った歌なんて覚えていない

ビデオの中のぼくはあんなに楽しそうに踊りながら歌っ

ているのに

一年に一度だけ

おばあちゃんが歌う

「うんじゅん わんにん 艦砲かんぱうぬ くえーぬくさー」

泣きながら歌っているから悲しい歌だと分かっていた

歌った後に

「あの戦の時に死んでおけば良かった」

と言うからぼくも泣きたくなった

沖縄戦の激しい艦砲射撃かんぱうしゃげきでケガをして生き残った人のこ

とを

「艦砲射撃の食べ残し」

と言うことを知って悲しくなった

おばあちゃんの家族は

戦争が終わっていることも知らず

防空壕かくごうに隠れていた

戦車に乗ったアメリカ兵に「デテコイ」と言われたが

戦車でひき殺されると思い出て行かなかった

手榴弾しゅりゅうだんを壕ごうの中に投げられ

おばあちゃんは左の太ももに大けがをした

うじがわいて何度も皮がはがれるから

アメリカ軍の病院で

けがをしていない右の太ももの皮をはいで

皮ふ移植をして何とか助かった

でも、大きな傷あとが残った

傷のことを誰にも言えず

先生に叱しかられても

傷が見える体育着に着替えることが出来ず

学生時代は苦しんでいた

五歳のおばあちゃんが防空壕ごうでの歌を歌い

「艦砲射撃の食べ残し」と言われても

生きてくれて本当に良かったと思った

おばあちゃんに

生きていてくれて本当にありがとうと伝えようと

両手でぼくのほっぺをさわって

「生き延びたけとう ぬちぬ ちるがたん」

生き延びたから 命がつながったんだね

とおばあちゃんが言った

八十年前の戦争で

おばあちゃんは心と体に大きな傷を負った

その傷は何十年経っても消えない

人の命を奪うばい苦しめる戦争を二度と起こさないように

おばあちゃんから聞いた戦争の話を伝え続けていく

おばあちゃんが繋いでくれた命を大切にしてい

一生懸命に生きていく